

清風瑣言

秋成著
天童寫

單

特別
イ 4
3159
B 12



14
3159
B12



清風瑣言序

夫天地之生品物也。形氣相合。味生其中。而物
之味之淡。莫淡於水。而淡之於氣也。為清。故物
之性。莫清於水。而淡能受五味。故淹蔗則甜。梅
則酸。茅薑之辛。茶蘆之苦。無入而不染其味。然
而水性則已矣。唯茶之於味。以氣為神。其神至
清。故茶能知水。水能知茶。品不高。水失其性。



水性不靈。茶失其氣。故曰茶者水之神。水者茶之體。凡天壤之間。氣味之相合。莫若茶與水焉。然而茶非煎者。不能發其神。余嘗謂茶點者為賢。煎者為聖。何者。茶以氣為神。味抑末也。若點者。則所尚在味。其神則餒矣。故水中著鹽。茶中著香料。皆喪其真。水之與茶相得。特以其清耳矣。而茶有真香。有純香。有浮香。有間香。水有甘



者。有冽者。有輕者。有重者。譬之猶人性之萬不同。故人之好之。非其性至清。則不得會其真趣。而適之自然矣。若乃涉首陽而采薇。吟楚澤以佩蘭者。窮而顯其清者也。洗耳哇賦者。激而鳴其清者也。此二者皆不得其自然。未若彼悅白雲于茅嶺。眺南山于東籬。或耘籽谷口。或臥遊五嶽。安而樂其清者也。乃至竊吹鍾阜。濫巾方

山者。偽而清其名耳矣。唯其樂者。而後可以會
其真趣矣。可以適之自然矣。今之所謂茶人者。
大率竊吹濫巾之徒。而不揀茶之揜槍。不辨水
之陰陽。不問湯之老嫩。柴汝官哥建者之蜜。張
成揚茂別紅。方位川螺蚶種。雖得之物。竟傾
產以供夸具。不亦可咲之甚乎。嗚乎。自北其人
与物氣味相投。猶之茶与水。烏得會其真趣。而

樂其清乎哉。無腸翁浪華人也。博洽彊識。於國
書訓詁典故之學。考覈甚精到。且妙於國風詩。
然而性耿介峭直。泊然自安。是以世或罕知焉。
歲癸丑。來遊京師。寓華頂之麓。与余居。喚呼可
相通。是以旦夕款晤乎一堂。頗坐其為人所居
筆研之外。茶具數事而已。蓋其好茶也。因其性
之自然。亦猶茶之於水焉。間者著清風瑣事。使

余題其首。余以為此直游戲之一端。而不思以
盡其為人。然而會其多趣。以樂其清者。可以想
見。則亦有足以窺其為人者。乃序以論讀茲編
者。

寛政六年七月己丑

榊亭源之熙撰

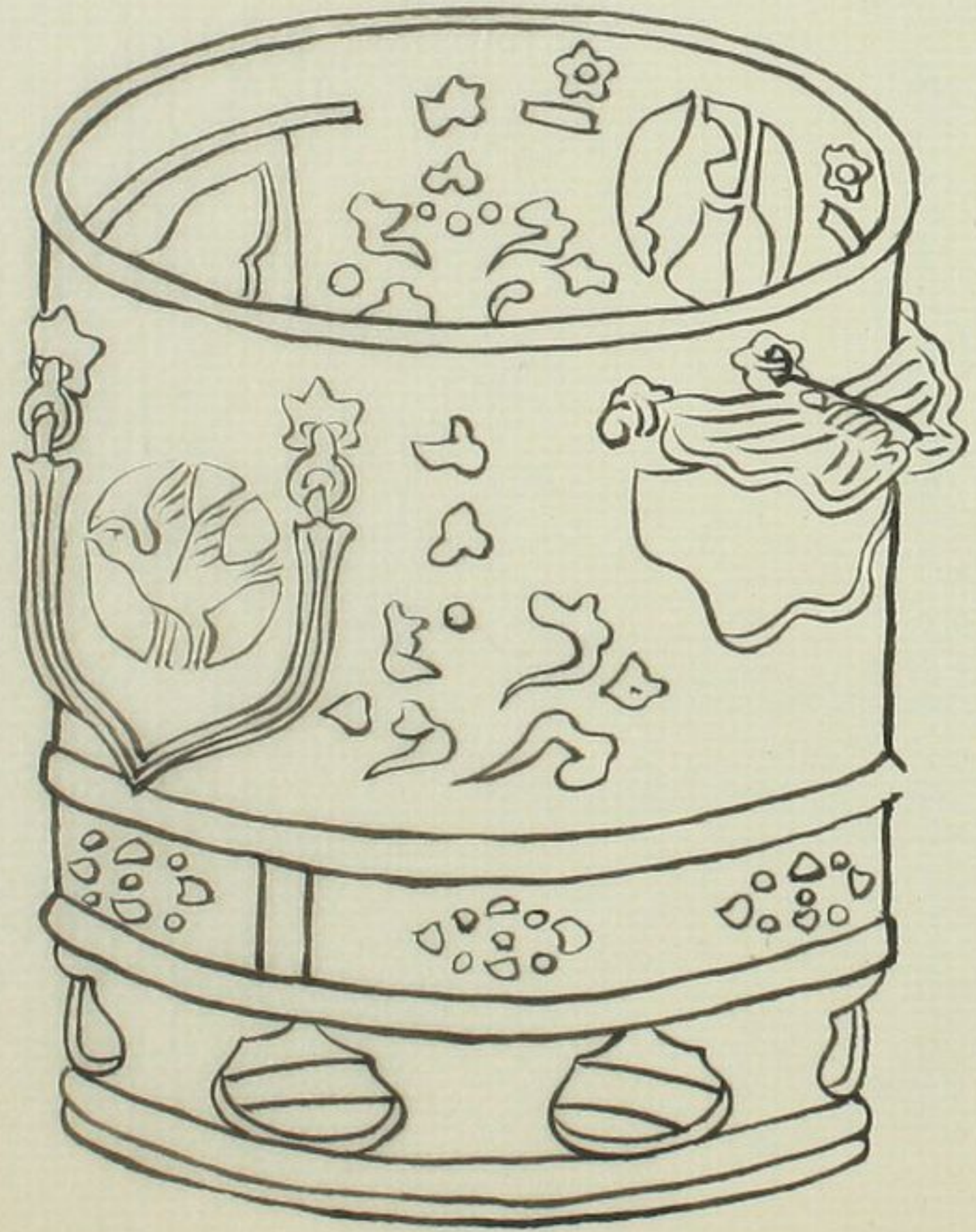
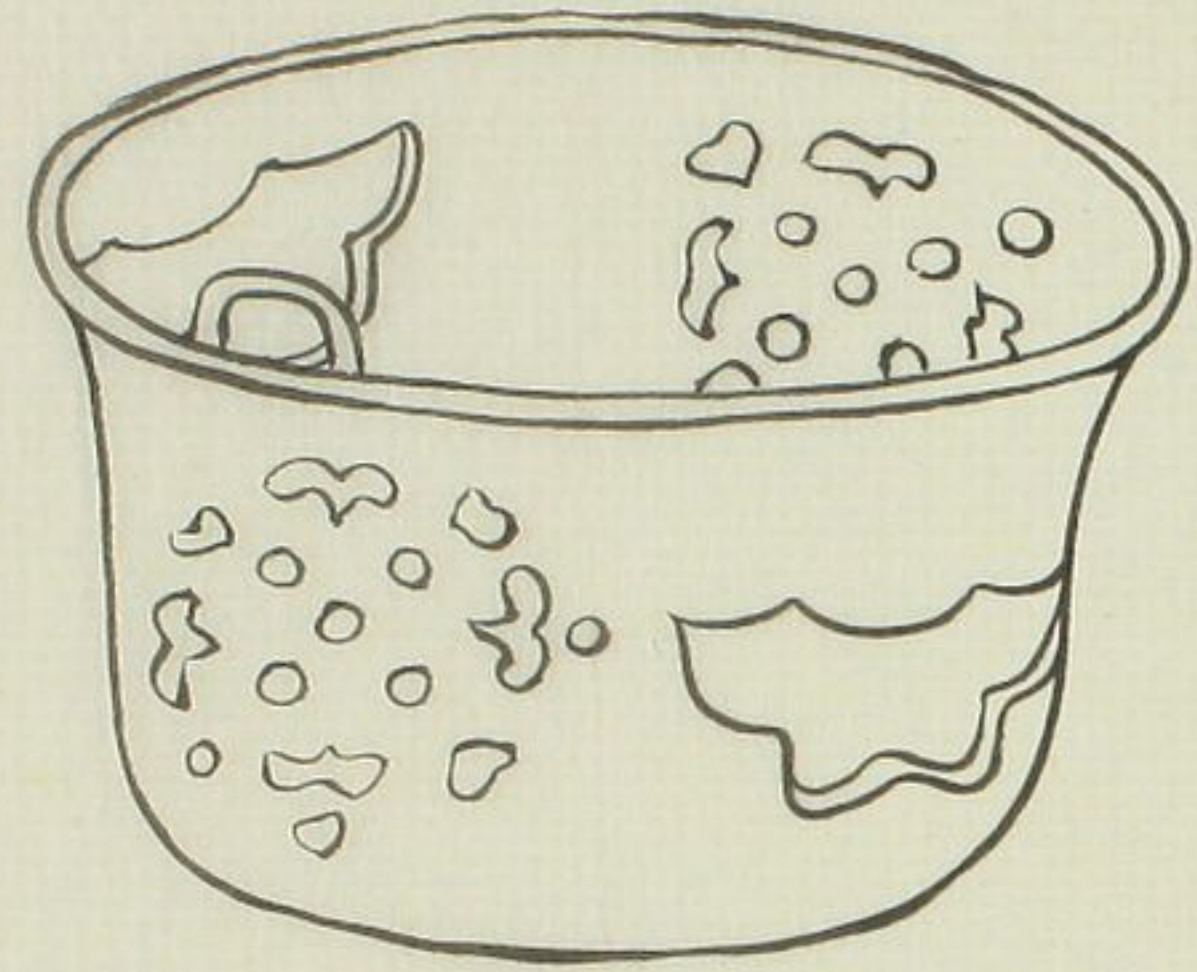


津の玉子花の八重ふきし新なるそり
多社まき流き紫の烟よ老の寐まよ
と斜きも花かゝるあふ傳花み春乃
木花年を一つ美て急心志秋のあや
あそ清めきむいさきこの酔うちう
こまむへもむあしの人おいへりな
ほれくは花のまへり暖きそは
あなまよ山う一子阿新めらほくそ七

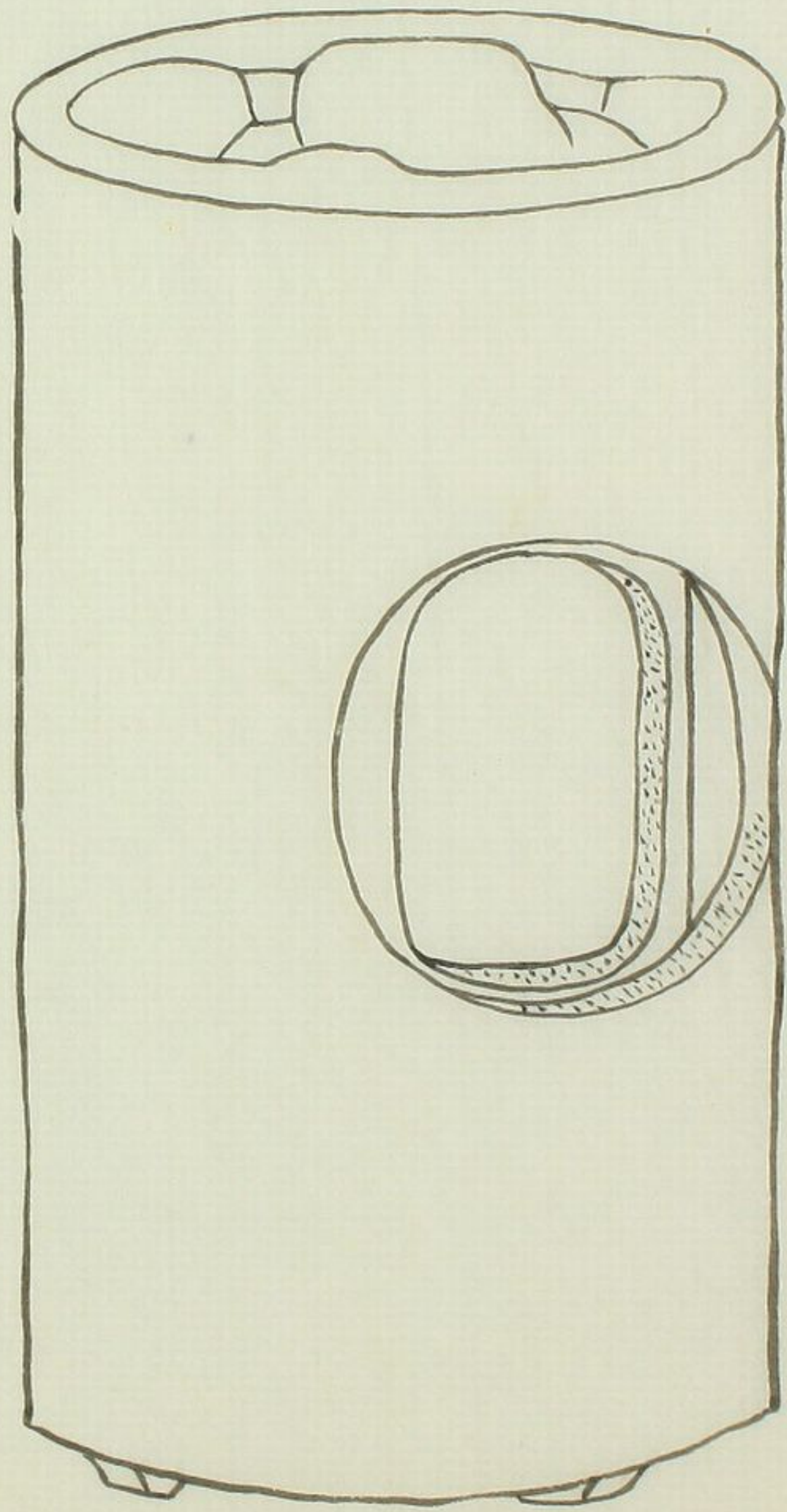
よくとりわれきい花衣よこは流しより
 祀も大を羅ちれなといへる人茂を
 たりあいに社いおのの友能はひそ
 妻の木能も木の板はら花よ如この
 小甕に波を狩くやの正打入しらせ
 いふ香はうさこかめり奪い社
 むものかき名

無賜

和州法隆寺所蔵古銅風爐圖



唐製風爐圖 一云涼壚



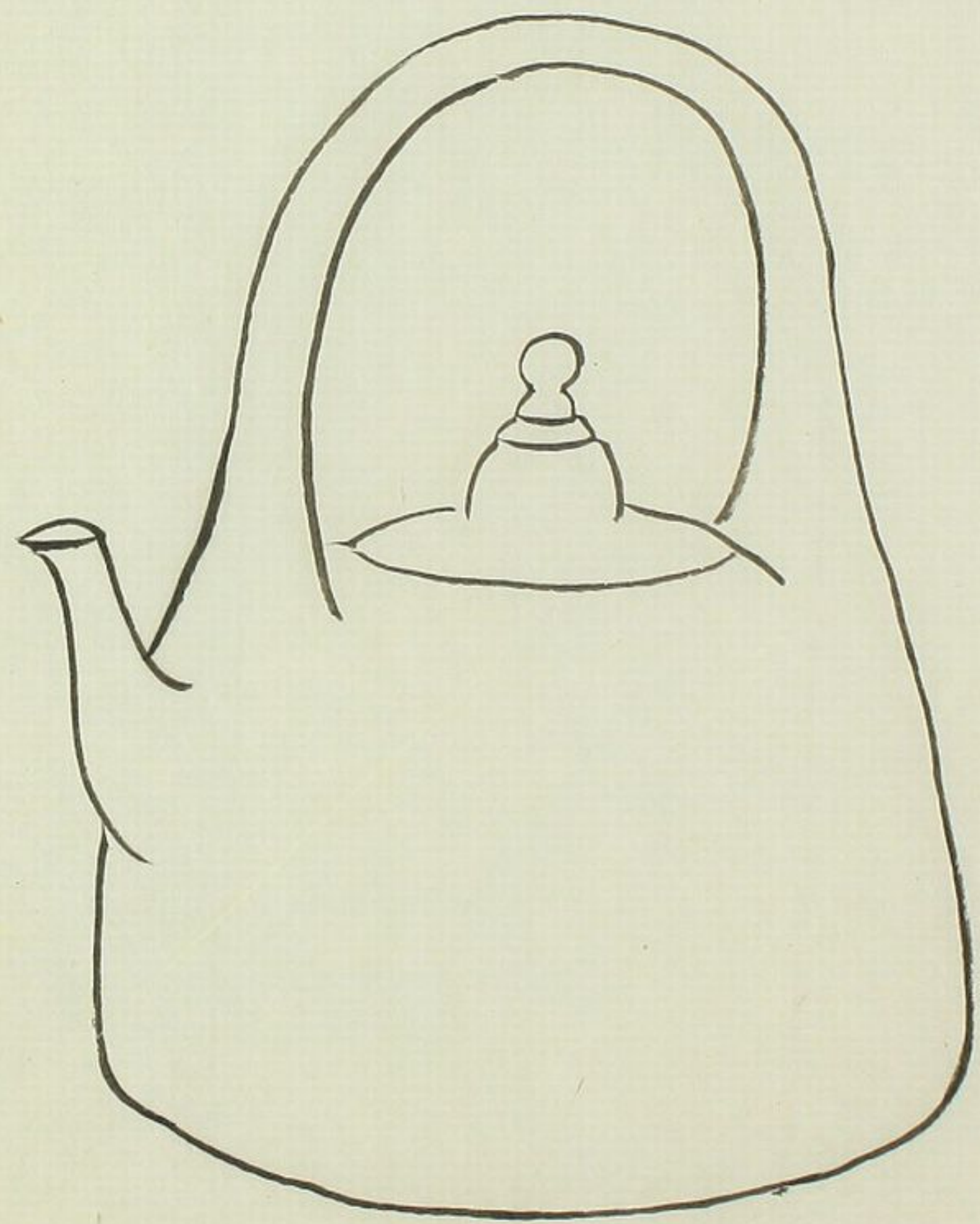
真音彙韻火灶圖

即本邦秋田所製風爐畧近似之



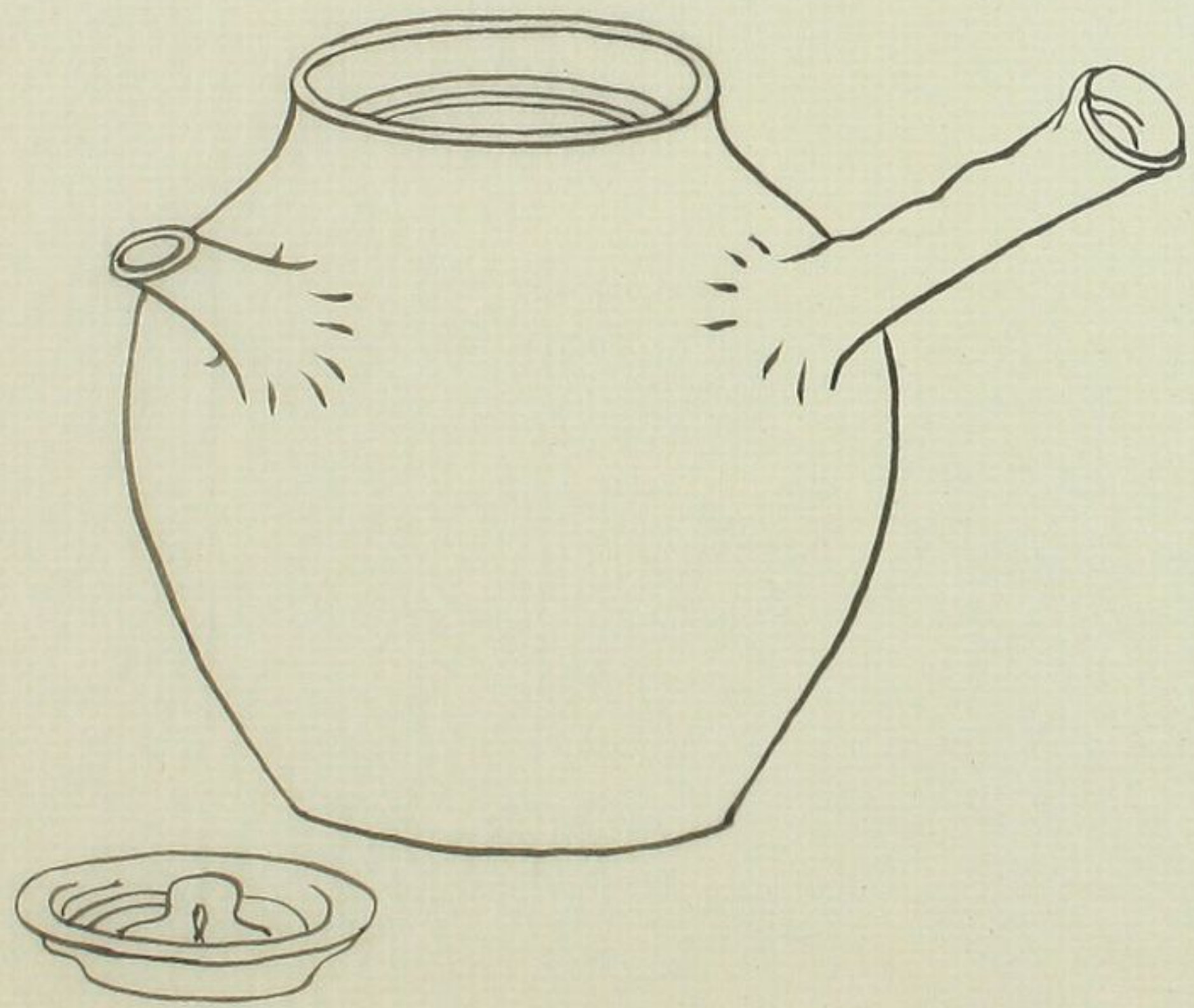
茶壺圖

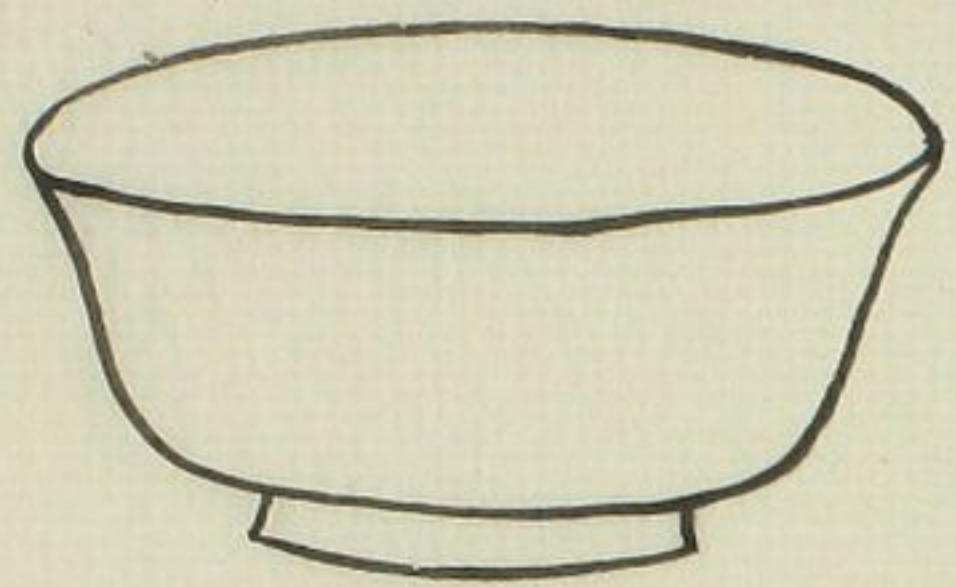
見真音韻



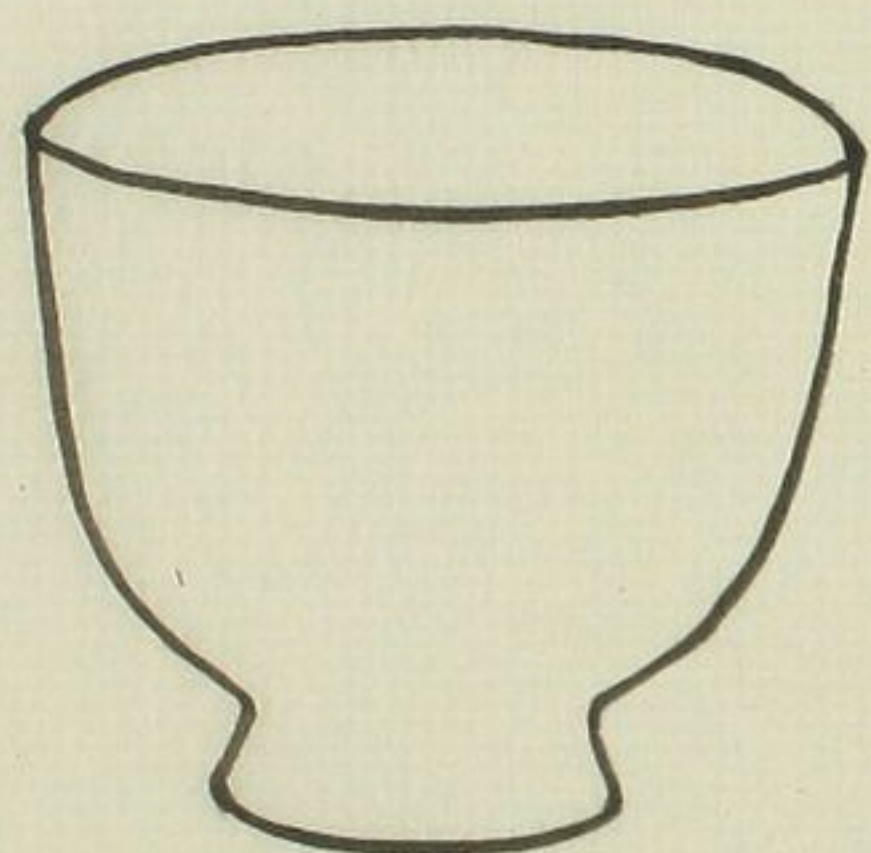
賣茶翁所藏唐製
茶瓶圖

今歲在燕巖堂

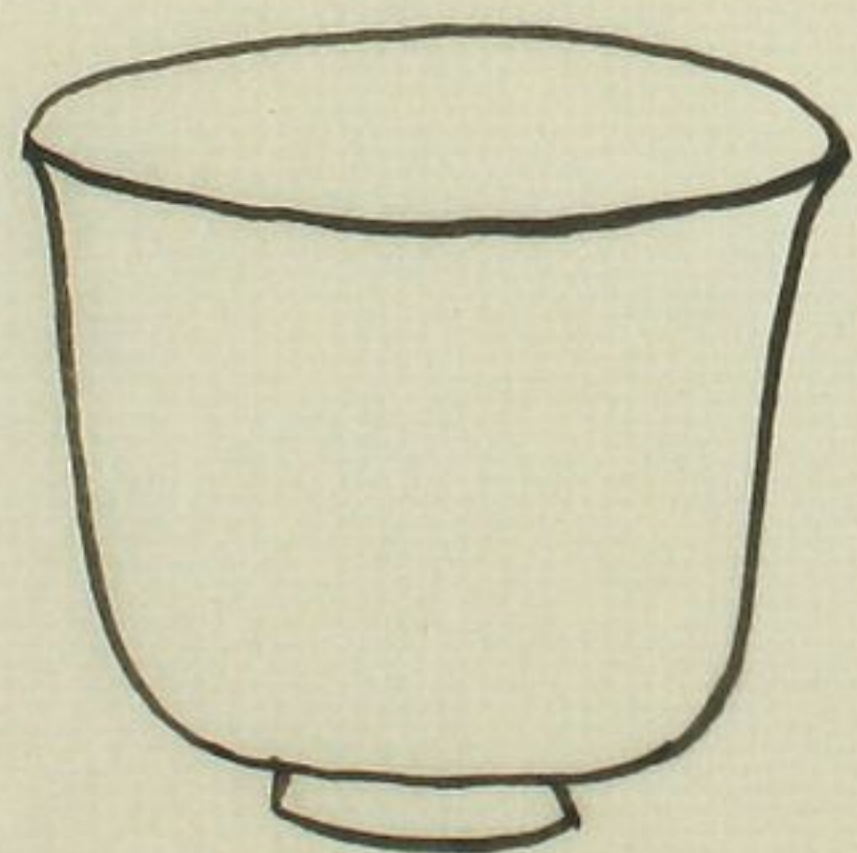




盆

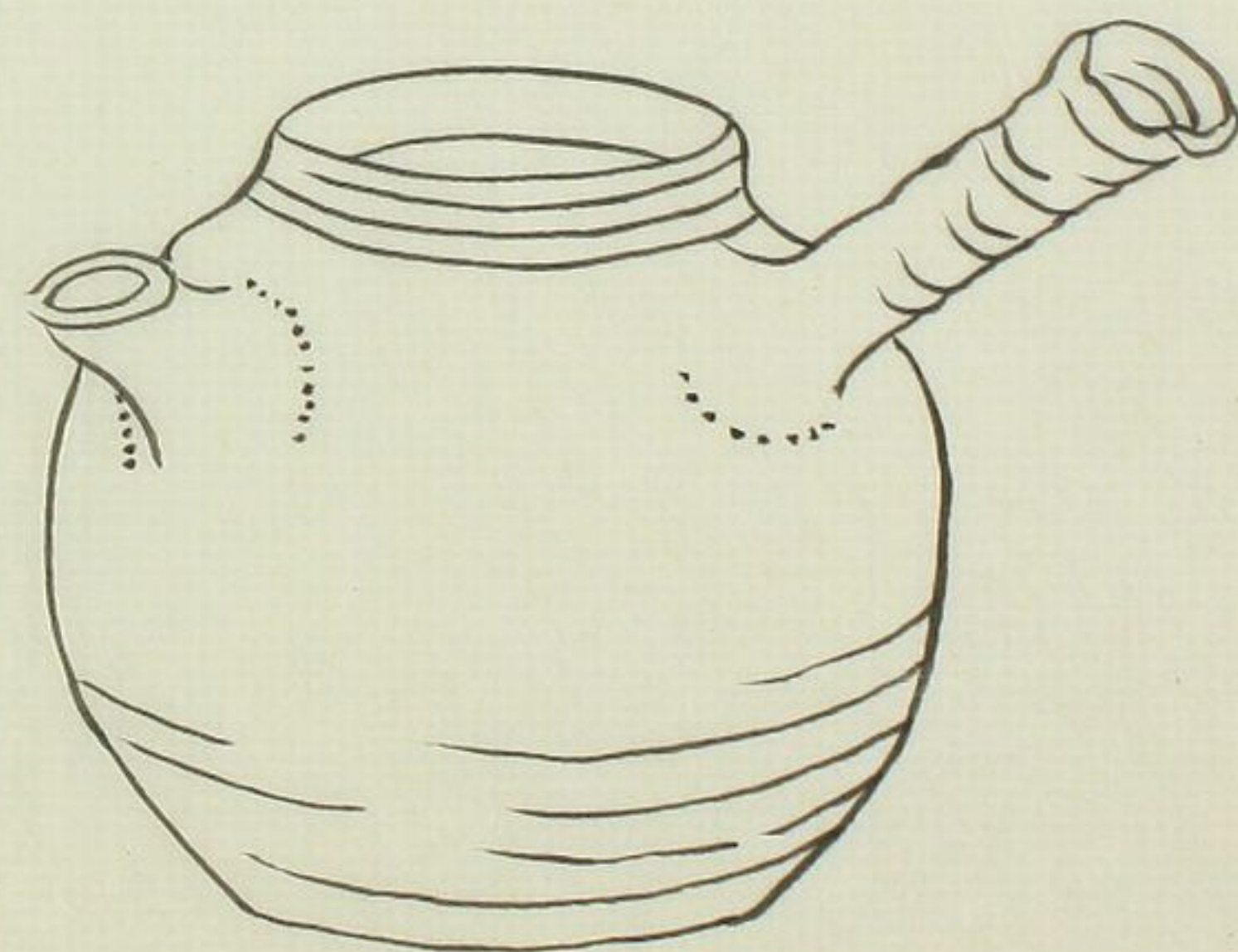
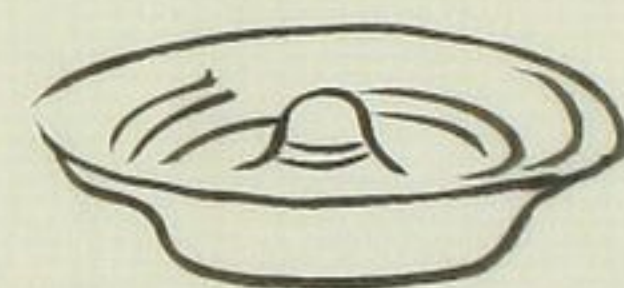


鍾



甌

南蠻製茶瓶圖
鶻居珍玩



清風瑛言 上

東渡

茶乃唐國ミクニみ來りし者。嵯峨天皇は清代や始なり
 けん。弘ニ六年ハ四月。近江の志ヲたれ崇福寺ソウフクジに祈幸れ
 次ツギにハ林ハシ釋シヤク寺ジにラ響ヨ興キョウをト信トめル時。大僧オホソウ正シヤウ永エイ忠チュウ
テ自ツ志ツ茶チをテ志シてキまリしとシてスるニ也。同六月に。
 畿内近江丹波播磨等ノ地ニ出スるニ也。茶子チヤノミをシ種ウエさせ給ハ
 了。其ノ日本紀略ニ出スるニ也。又ハ清風集ニ。大上ニ天皇

海公の帰山を送ると云御表子。道俗相分強。其
多。今秋略諸亦良縁。皇宗酌蘇日云暮秋前首
傷難。宜雲烟。こゝろ一。は海公ハ誰者を知され
ども。世系ハ景。云々。天長までの詩賦を乞撰た
まへ。右上一。即漢宗ハ清上なり。は天白王ハ弘二。其
ハ府の憲宗ハ元和十年。よ。ゆつて。陸羽を乞。ゆ
十餘。其可ちり。其後宇多。上。皇清。其日。元
天。重仁。和。与。ハ。清。宗。ハ。答。之。あ。る。一。こ。さ。り。

花もも海情 兼業よんをれ。按する。日本紀略の
昌泰二年十月。上。皇清。爲。符。文。戒。其。ハ。東。寺。に。て。也
元。和。同。三。年。正。月。天。皇。朝。觀。日。兼。右。相。を。以。て。陪。從
此人。み。詩。賦。を。乞。め。給。り。ん。を。り。聖。厨。無。漏。露
谷。有。葉。蒼。尾。之。下。遂。不。云。宗。と。云。詩。兼。業。又。其。の。に
尺。名。一。ハ。日。れ。清。化。も。や。智。す。や。又。其。君。院。ハ。兼。安。五
年。七。月。八。月。改。元。兼。業。上。皇。ハ。六。十。の。法。を。た。れ。の。議。よ。其
る。を。康。和。の。何。よ。ほ。ま。さ。る。ん。ま。の。下。に。あ。い。案。具。を。乞

羽の突座に尋め出せしかど己に珍失の由にて。に和
 糸串エシダウを獲らるるを取出させ給ふ。玉海あり
 又由。是を宇多上皇乃清造物ちるべし。給ふも種ウエ
 培ヤナフ者らるるに絶つらん。後あるの境の建久三年に。
 建仁寺ケンニジの果面宗エサイノソウより帰朝の日。茶子を將ありて筑前
 の國背セ山ヤマに種ウエをまかすも齋束ありて。
 榎尾トナリの山ヤマに送らる。ゆゑをまかす山に種ウエをまかす。
 永く世に廣まりぬ。茶も菓子と粒を収めておくゆゑ。毒と於山寺より獲むと云り。茶を故

山林之士の飲食をそまを。一旦貢税とありて後ハ。
 僧家カキキヤウに大茶をの取用ひり。茶チヤの茶チヤとに求め来ら
 たり。湯トウや茶チヤ。其キヤウシキの式シキ。宋乃德輝の百未清規
 と云ふ。香カと名あり。ゆゑ又字法ワカチウエは分裁サケありてあり。
 宇治の園ウヂノ民タチ。毎スナ年に新茶を高山タカヤマに熟マありてゆゑ。
 此シカウ茶チヤは供ソナふと云り。と給ふりや否シカや。後世榎尾トナリと茶山
 と稱ナふも此シカウ茶チヤ由ユあり。種茶葉に。清拙和尚と云ふ。唐國野桂。榎尾行ふ。茶も種。又四谷。り。到。茶
 山山瞻眼一一寺寺。茶茶の山山。西西。唐唐。信信。府府。北北。を。唐唐。朝朝。の。造造。路路。也也。白白。茶茶。山
 といふ。浙江温州の永嘉縣ウヱノカをいふ。

攷古

茶ハ字中ハ茶也。中唐の頃より一画を省き用ふと。用
刺録即唐の頃よ出きり。上右茶三行と云者三行も。その中に
苦茶と云者それ茶やと云り。毛待毛待は。誰謂誰謂茶茶其
甘如甘如荷。又董董茶如茶如飲飲の語ハは者多多苦苦也也とすれば
甘味生甘味生ずるなり。亦亦雅雅ハ茶也也と云。音音録録ハ茶ハ茶也也。
茶小如茶小如梔子梔子。冬冬生生。京京可可煮煮作作羹羹飲飲。呼呼早早取取の茶
晚取晚取ハ茶也也。或曰或曰茶茶。蜀人蜀人名名之之苦苦茶茶と云り。
今物世に
再考曰茶

楊雄楊雄方言方言ハ。蜀西南人蜀西南人謂謂茶茶曰曰叢叢と云。茶茶子子ハハ
名名選選。一名一名游游。冬冬と云り。茶茶録録の二種ハ杖杖冬冬に杖ぬ
と云。杖杖の字字もて。茶茶の字字ハ茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。
苦茶苦茶とも呼て。冬冬と云り。茶茶の字字ハ茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。
其其茶茶不不食食。故故茶茶字字不不立立とも云り。是是を意意飲飲とす。其
子子ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。
茶茶千千斤斤。茗茗三百百斤斤。是是知知自自秦秦人人取取蜀蜀而而後後始始有有茗茗。
飲飲之之。子子ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。茶茶ハ茶也也。
漢

代よハ少に目言相如楊雄等茶に名あはれども其精
細なるものハ少あらず丹平子茶山君ハ彼之換骨孫才と
云し漢代の話ちり三國の時呉の章曜茶を好みて
孫皓是よ茶芽以代酒賜ひし事由然ハ魏晉乃
漢より漸行をゆるぎ知るべし晉の王湛人至れむ先
茶を飲む士大夫是を若中彼家よりをさるる
水厄之云し字が劉琨張載遠祖納海安桓温尤思
の流茶飲ノ名あはるる漢書に云るは南に漢宗の

天寶中茶仙陸羽 字鴻漸一名疾字季疵號東園 世よ出。肅宗代宗の
る胡聖と交りて茶法三篇を著し茶法ハ法則を立
器を製し其味を論ぎて天下に茶飲の法雅致
知りあましく致ふる事成りて常伯燕盧仝劉禹
錫が出て並行つ事宋に到て盛や丁渚茶表表大
小乃龍園に表きてハ友園私園大よ一すけ強民よ
糲茶の苦困者も少ゆ茶の美稱世の文人ねるに
少うしと換骨孫才代酒從子法風使白

泥。赤島。瑞雪。砒重。見。酸。苦。死。晚。世。侯。ハ。豹。囊。子。大。
出。此。冷。面。子。法。人。林。玉。標。有。有。吉。符。葱。ハ。又。香。瓜。雀。
舌。麥。顆。紫。芽。ハ。抹。芽。ハ。稀。ち。少。又。乳。妖。花。乳。ハ。
そ。色。味。を。ま。り。の。り。の。是。ハ。程。舉。重。す。る。も。た。亦。
不。飲。マ。於。て。ハ。地。名。実。者。造。ハ。因。キ。テ。友。松。の。園。氏。の
稱。呼。廣。大。リ。テ。記。す。に。塩。也。と。志。す。す。も。は。小。よ。
て。ハ。無。益。の。勤。成。ち。ば。お。よ。ぬ。べ。し。

稟性

茶ハ効奏。法。出。ノ。取。出。悉。ク。茶。葉。ノ。が。し。の。茶。葉。
味。苦。甘。澁。也。と。考。す。也。法。儀。痰。刺。小。便。去。痰。熱。心。
消。々。人。少。雅。下。葉。消。食。的。自。ハ。出。歩。ハ。試。一。所。ヤ。林。法。
の。山。茶。法。儀。ハ。茶。即。茶。也。也。服。則。去。滯。而。化。食。
ハ。湯。點。之。則。及。滯。隔。而。損。脾。胃。蘇。東。坡。の。茶。法。
除。煩。去。穢。也。因。不。可。以。茶。葉。能。中。換。人。強。為。
少。苦。人。云。如。茗。飲。事。後。人。多。患。氣。不。患。苦。也。
雖。損。益。相。半。而。消。陽。助。陰。益。不。償。損。也。とい。は。り。

然ども人の性天は稟て各異なり。或は陽気多し、或は陰氣多し。陰勝者は温暖を以て補ふ
法涼を以て宜し。陰勝者も温暖を以て補ふ
る。業岐の活子段也。又常言は物ハ腸胃に積て
其害を及ぶ。紫西の味茶を飲た。茶を飲て一
杯飲らぬも、ゆゑに身不苦こさず。是酒飲の宿積
こづき。但痛は甚母更ら。飲茶飲序は。難滞消
へ。一日之利暫佳。瘠氣耗精。終身に害斯大。
後世則帰功。茶力。後患勿不謂。茶葉。之。此。也。

ハ。茶は癖む人ハ激論して、こゝにあは。穀肉良薬も
度に入る。其ハ言者好して量よる。ハ。俗疾の形。為。
損益れ論も暫くさへ。陳先補の。茶。也。ハ。茶。之。
其。性。於。人。之。有。性。人。性。皆。善。茶。性。皆。法。と。云。ハ。茶。
の。清。雅。と。云。ハ。語。也。茶。の。性。之。是。に。清。也。人。世。よ。
お。ま。て。善。悪。の。説。喋。と。云。ハ。言。ハ。忌。む。よ。也。好。む。ハ。
失。つ。と。云。ハ。思。ゆ。ハ。

天時

作法未ださうり。茶に子まき茶ガカリおわの名も此謂
也。茶西云。宋ノ於テ政元ノ中。内製ル後苑又茶取
を二并ト下古數十人を其中に徘徊セしメ。多ク群に
雜言を呼ハしム。次の日於茶二三分許茶取
ちを。銀鑷子を以テ拵ル。其茶一七粒を
子共とり。清水を加ふ事未ダ。ちを。茶取
社前おの未ダあるをアラトス。

製造

茶に蒸焙ノ製法あり。竊イ日曝の製法も。焙茶ハ
上品炒茶是二次日晒ハ下品也。宇治伊樂也蒸
焙をさうとす。他邦の茶種々ちをべし。但九州四國
の未名ハ炒茶ハとて呼ぶ。焙茶ハ蒸らんた後とす。炒茶
茶ハ淹煎とす。淹又瘡ト作ル。焙茶其二茶取者を
をまじし。此茶蒸レ茶久く行ハス。蒸茶者に亦也。
蒸茶の茶味省も清也ナし。又熟製法あり。ぬハ
者を炒ルとす。木ノ心を取テ甘味なし。日晒の

茶と清の割涼長は茶史よ。茶宜は日曬者。其製
る法は。焙以火炒。又云。火乾者。以氣熱。以日乾
者。以茶出。又云。日曬必有日。茶用清布蓋。蓋之可
免。さらんをわと。清玉の曝乾なる。必日曬ありて
下品のこ

地靈

茶を宇治の巾郷を家地。大鳳寺。水幡是
よ次。友園外室。慈徳の妻。尤精ぬや。小倉を由。

池尾田系は村里。昔一園庭をつかして。生きたり。
宇治ある處に清國の建溪。小苑あり。又其山
骨を抜て。灰を造ら出す。此石定山よ。出さす。地
れ土石か。すて茶に因縁ある。う。茶とす。謂べし。

品解

上製茶は。形少からむ。初後の昔。祝ひ。三院なり。
祖母昔。いも。しの白。志ろ昔。若木探。い。い。むし。
一の白。む。白。鷹。か。鱗。石。初。存。凡。九の白。女。屋の

東一^{カマ}等れ名。家々に競ひ出す。又垣^ツを以茶。別儀
上り^リ理^リもして不^レ等^レおからむ。

蒸^レ不^レハ折^レ雀^ヲ。白折^ヲ馬^ヲ。上^レ衣^ノの餘材^ヤと云^フ。

茶^ノ茶^ヲ有^ル。若^キ茶^ヲ有^ル。茶^ヲと云^フお半^スするも。其^ハ蒸^ハ

尖^{サキ}ゆ^レたれ^志。茶^ノ味^共つ^レる^一。蒸^ハ擣^ハ山^岳は名^也。其^ハ

厨^ノ村^ノ朝^ノ山^ノの^下に^在る^也。朝^ノ山^ノの^下に^在る^也。朝^ノ山^ノの^下に^在る^也。

里^ノ人^ハ多^ク。上^レ衣^ヲ推^レ成^レア^ラと稱^ス。蒸^ハ擣^ヲを^リと^云ふ^也。

其^ハ餘^不能^テ於^テ多^ク記^ス。

表異

西^ノ土^ノにてハ。白^色の茶^ヲを^云ふ^也。此^ハ西^ノ土^ノにてハ。白^色の茶^ヲを^云ふ^也。

所^ノあり。大^ニ茶^ヲを^云ふ^也。茶^ヲと云^フ茶^ヲと云^フ茶^ヲと云^フ。

其^ハ條^數圍^ノを^云ふ^也。茶^ノ産^林之^間偶^ニ生^ズ出^ル。

此^ハ人^カ所^ノの^致有^ル者^ハ不^レ過^ス一^二株^ニ。

所^ノ造^ルは^二三^株而已^ニ。茶^ノ葉^ハ多^ク。九^難蒸^ハ擣^ヲ湯^火

一^失見^レ己^ニ変^レ而^シ常^不須^ス事^ヲ造^ル精^微運^度得^ル宜^也。

表^表眼^徹如^玉之^在襟^也。它^ハ無^倫也^ト云^フ。其^ハ

大葉ハ老ク候。宇治人々新芽^{ヤブ}漸^シニ^シカ^シテ。浅^ハ総^ニ
ちる若^ニ間^ニ出^テづ。是^レを^レ摘^ルむ^ル儀^ハあり。表^ニ積^ルル^ル儀^ハ
絶^ニ不^レ可^レ也。後^ニ水^を人^々參^ルル^ル儀^ハお^レり^し。西^ニ出^ル。白^ニ茶^ニ。こ^のに^ハ淺^ニ毛^を
田^を刈^ルもの^と。草^味あ^らず^や。國^ハ大^小土^地の^存存^スて。
物^の性^不回^ル。考^理あ^らず^し。况^や海^洋を^隔て^る
必^ス也^{。是}も^もお^レり^し。又^ニ新^芽芽^芽水^水く^く
白^茶は^若生^生は^れど^も。そ^の出^ルハ^ハ切^テ向^テ。多^ク味^味世^にあ^らず^{。是}
る^レ水^を必^スす^レ味^味換^スる^ルに^{。是}レ^を摘^ルむ^ル儀^ハあり。

是^レハ^ハ西^出して。白^茶に^非ズ。誠^ニ
一^ニ味^味は^ハ要^スル^ル儀^ハあり。要^スル^ル儀^ハあり。白^茶に^非ズ。誠^ニ
之^レを^レ有^ル。白^茶の^抱向^テ。若^クや^{。是}レ^を條^ニ茶^ニ。初^ニ生^ス
不^レ白^キ者^や。是^レを^レ色^鮮白^キ者^も。味^苦澁^ニ。堪^ハ
不^レ也^{。是}レ^を宇^治人^々。ふ^らず^{。是}レ^を茶^として^{。摘}む^ル儀^ハあり。是^レを^レ白^茶の^名を^レさ^すべ^し。或^ハ人^々。茶^として^{。白}茶^は
の^名を^レさ^すべ^し。或^ハ人^々。茶^として^{。白}茶^は
と^呼ぶ^{。及}前^ハは^{。是}レ^を又^ハある^{。人}々^{。茶}杯^として^{。黒}茶^を

考む。益中ハ龍花の種白を試る月にて。あま白
色の茶さうよ。ねむとさり。つづも所証ヨリトコロなり。説ども
あま。正しく木親茶種よ。奇跡の茶種ちるを挙
ぐる。ひてさる。いし。

品目

近江の信樂シガラキの茶種多し。山中ハ村民。園庭を
一帯よて。遠播セウブをり。茶種の花種此地て下才一
なり。山吹ヤマフキ。一帯ハ名のみあま。さくさゆ。山吹ハ茶種
なり。

とも於かの地よ
出す
茶代。茶を。湖水。花種
種皆絶也。茶種ヒシ多し。ゆり。國民湯
に於。茶種ものゆり。又茶種アキヒトの園庭戸ハ私よ。茶種
找没きて。名と物と。茶種イにたふも。又彼も。茶種
合カフ茶種して。一帯と。茶種も有。し。清酒家ハ。茶種
甘キサと。茶種梅して。戸々に。茶種を。茶種。又昔ハ
一帯ハ。茶種山吹して。茶種第一。茶種を。茶種。さる。
大親茶種。お。茶種。互ハ。茶種。茶種。

獲ふち茶は美悪。古手裏造り巧拙而已。置園
地を名名所能増減哉。悟人之茶。因有者優而
後劣者。昔肩向くは務者。是亦園地不常也。之を
又水たけやくよわけ厄ありしを志し。味は市に水
る人。茶は其は面目にあふる難し。

洛水如心寺は花園。近江は永源寺の枕溪。土山
の曙。永源寺。美濃は席溪。古保。播磨の仙臺。栗
生蓮。山岳の多。茶利の爲ちうちうは佳茶や。それ

を名として。郷民の出きるは示し置たり。

杣尾高雄の産。昔は上巻石の種ありしや。涼淡茶
ちと心なりも者しを。今も佳茶なりしと云ふ。

法園の名産甚多し。伊勢は河上。伊賀は坂部。
大和の字生紀は首野。尾張は内津。美濃の香
老。駿河は菅久保。西しては肥前の上島。登土首
なごん。和後の産子尾。此は昔の茶。其餘。柳川お
楽ホきこし。多くは鍋炒茶にて。味醇く。清軟

送し。又府の茶とて、ミヤウハク蒲船の將東モチウタ水る者也。近年佳
品也。武彙スライ松セウ花ラ井リヤウ茶セイ等ラニ名チヤありとも。
其物より、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
カ播磨のカ彦谷ヤ日向茶也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
雅の友ありとぞ。

入雜

茶に、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
茶ハ日未出也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。

に充め、アサヲ麻皮を以て固カタクク敷り、カ一枚宿き、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
採て、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
一、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
半開半放の、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
量りて、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
茶、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
茶一層、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。
茶を以て、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。昔々、ミヤウハク蒲船の草山クサヤマの泉也。

取て沼中（大）に度せしの草湯（チヤウタウ）よ煮て（イテメル）取出し。
冷るを待て踏（サム）踏（サム）煙（カハカ）一収むる。但木犀花（キキョウ）の枝
葉（テイ）を去（リ）草（ロ）草（チ）垢（ウ）を採（エ）ひ去（リ）べし。兼（キ）湯（トウ）よ（石）楠（ノ）柏（ハク）
把（ヘ）皂（サウ）美（ミ）ホ（ケ）は（カ）事（コト）を（カ）指（サ）て。茶（チ）に（カ）和（ワ）守（シ）桂（ケイ）棧（ケン）尤（ユ）奇（キ）也。
自餘（ソノホカ）山中（サンノチウ）の（木）の芽（メ）系（ケイ）皆（カ）可（ク）飲（イン）也（ト）。李（リ）時珍（ジ）
の（金）お（お）出（出）料（リョウ）よ（人）末（マツ）擦（サツ）山（サン）栲（コウ）烏（ウ）药（ヤク）法（ホフ）皆（カ）可（ク）
飲（イン）也（ト）。八（ハ）常（ジョウ）食（シキ）の（水）を（ク）去（リ）て。清（セイ）雅（ヤ）の（友）あ（あ）ぬ。
強（ツヨク）て（是）お（の）種（シユ）ハ（一）時（ジ）の（身）の（こ）。不（フ）末（マツ）末（マツ）物（モノ）固（コウ）

ふ（の）以（イ）空（クウ）偽（ヘイ）況（キヤウ）飲（イン）食（シキ）る（物）尤（ユ）不可（イカ）也（ト）。故（コ）茶（チ）有（ユ）入（ニ）空（クウ）茶（チ）
者（シヤ）建（ケン）人（ジン）辨（ベン）為（ニ）入（ニ）雜（ザツ）と（云）なり。唐（タウ）宗（ソウ）此（コ）茶（チ）よ（龍）茶（チ）好（コウ）を（好）む
加（カ）へ（し）る（る）。此（コ）茶（チ）は（去）る（を）過（カ）つ（て）考（カウ）して。花（ハ）露（ロ）を（取）る
つ（ま）に（劣）まり。依（ヨ）て（と）考（カウ）る（者）絶（ツツ）ぬ。

煎法

蘇（ソ）子（シ）瞻（テン）の（詩）佳（カ）茗（メイ）似（シ）佳（カ）人（ジン）と（云）句（ク）有（ユ）。予（予）云（ク）。茶（チ）者（シヤ）高（コウ）貴（キ）
人（ジン）の（意）接（セツ）する（か）ぬ（し）意（イ）熱（ネツ）せ（し）。法（ホフ）を（澄）は（い）る（法）
の（つ）る（法）と（云）。煎（ケン）法（ホフ）茶（チ）焙（ハイ）せ（る）茶（チ）ハ（意）を（入）る（法）と（云）。妙（ミョウ）

茶ハ淹煎エシセンの宜し。法別先湯ハフソウハ茶を烹ヒシぶよを依ヨひて。茶チヤを急キウに瓶ビンに投イじ即ソウち火ヒ爐ロを去サて蓋フタ上ウに置オキ一雲イツンの時トキ熱ネツするを待マて飲クむ。熱味ネツミの依ヨハ瓶ビンの中ナカの茶チヤを沈シヅめよを筈トキと去サ。淹煎エシセンの湯ユを沸フきて茶チヤ瓶ビンを注ツクぎの上ウに居スて茶チヤを先マ瓶ビンに投イじ瓶ビンの外面ソトより熱湯ネツタウを注ツクぎ温ユ茶チヤを内ウチに通トぎしめて。後ノチ瓶ビン中に湯ユを汲ヒ入スる也。杓シヤクを高く提ヒぎ湯ユを注ツクぎ。茶チヤ瓶ビンを勵ハす。熱味ネツミを待マて。法ホウ上ウは同じ。又マタ急キウに

に際カイして。茶チヤ瓶ビンを洗シふ法ホウあり。是コト茶チヤに茶垢チヤカウ有アルを去サるル。瓶ビンの瓦盆カワボンを洗シて。瓶ビンの熱湯ネツタウの水ミヅに洗シす。竹チク匙シを以モつて瓶ビンを洗シす。而シテ後ノチ湯ユを汲ヒ入スる。瓶ビンの熱湯ネツタウの水ミヅに洗シす。但シテ上ウ茶チヤの瓶ビンの洗シ法ホウは淹煎エシセンの湯ユを注ツクぎ。瓶ビンの熱湯ネツタウの水ミヅに洗シす。又マタ淹煎エシセンの湯ユを注ツクぎ。瓶ビンの熱湯ネツタウの水ミヅに洗シす。先マ瓶ビン中に茶チヤを投イじ杓シヤクハ温湯ユを汲ヒ入スる。茶チヤ瓶ビンを洗シふ。而シテ瓶ビンの熱湯ネツタウの水ミヅに洗シす。熟ジュク味ミを待マて。三サン巡メりして湯ユを汲ヒ入スる。瓶ビンを洗シす。

予が去るに、東の嶽茶を以て、煎茶之根を食
す。其時を以て一里の行程を帰家。は日中冬下旬。
郊外の晚景風尤烈しく。往來の人皆苦吟して
をる。予一人山風を面よ浴を以て。又も飢寒を
思ふ。却て汗をばし。厚着帽履よりゆりぬ。
是暫く茶仙の疎境より一考。平生酒を飲
みて漏危の病あり。まじき害を覚ゆる。蓋
嗜中は換るべし。又茶煎よ。茶を煎する者一人得
し。

此二人は趣三人は味。七人は名。施茶と云ゆる
をもあり。客を以て清雅多飲よ。ゆりぬ。密多に
あらぬるべし。

分量

茶は分量意する。一合の茶五分を以て。寸湯を
好む者ハ是に増べし。炒茶ハ量を不可過。又淹茶ハ
大方湯を次取に。量は増も宜し。但茶煎す
よ。りて活用者ハ。味甚濃。また色鮮若

千を~~茶~~方に^{コト}煮散^{ハク}方^テ。粗^ソ茶^サの^ホ茶^サ葉^ハを^コ帛^{キヌ}に^包。

 熱^ネ湯^{ツタ}に^漬して^投用^ヨする^ル也。茶も亦^ナ有^リ。宋^{ソウ}に^始。

 粗^ソ茶^サなる^ハは^法は^子等^トし^き若^クとも^思ひ^て試^シ

 り^に。お茶^チを^先瓶^{ビン}に^投湯^ツを^後に^汲て^飲み^し。

 志^シづ^く沈^{シム}を^待て^飲み。茶^チを^青茶^チを^茶法^{ハク}の^味

 軽^ケ甘^{カン}にして^又一^種の^趣あり。有^リ。宋^{ソウ}に^始。

 して^碾碾^{セン}の^法は^又ゆる^若若^ク此^ノ法^ノの^如き^カ。二^三友^ト

 と^茶粉^{チン}よ^から^りあ^るも^有り^り。但^シ煎^{セン}茶^チは^茶の^意

 人^ニ也。

茗戦

茗^{メイ}戦^{セン}茶^チは^抄我^ガ宋^{ソウ}代^ノの^文人^文士^士に^現づ^る。勝^{セウ}敗^{バイ}

 必^シ然^ニを^意。煎^{セン}茶^チは^茶の^意。

 也。清^{セイ}雅^ヤち^らぬ^名目^目な^らず^にて^おり^あら^ずし^意。煎^{セン}茶^チは^茶の^意。

 茶^チの^味の^或精^{セイ}妙^妙は^茶の^意。

らむ。君子は抱ひよあはるべし。

湯候

湯ハ甘水清流を擇び法を以て考ふべし。茶種
小老湯三沸法を立其儀始ハ茶瓶茶壺つれ
にても先汲水を出。蟹眼魚眼布おは序
次有中間も出。泉の湧が如く珠を連ぬるに
似終ハ騰波鼓浪とてりて水の性消。是茶を
考ふよその。是をるれむ湯の性却て鈍く茶類

不興。茶種よハ其音を極て候ふべし。初振驟の
三音をて。茶壺にり茶を煮るとるなり。
蘇唐に十六湯品に。湯若茶之司命也。湯澄り
ちれた。上品の茶も凡種とならるとるなり。

のゆきも。一條通より上考。尤清冽にして、茶飲
意にば、青苔鮮明ちれども。甘香ハ、冽氣を産
おにけり。又、汲み井ハ、下れ海濱より、土臭
ち、事能くも。茶飲無がし。又、市中所く、名
ある、宇治の乾梅の本。さ、久の井清井。あ、
井。杜鰲井。お、たま。地中の糸糸。あ、ひて、活動
ゆるもの。お、尖ちく。例、茶室、か、ゆる。早、天、ふも
酒、ゆるもの。茶を煮て、お、佳、ふ、ち、れ、を。是、亦

根よ汲るを、宥さる。自ら、清、潔、け、厄、あり、只、
清流こそ、今、示の上、首、なれ。さ、宇治川。か、下上
の、糸川。西、河、も、嵐山。を、か、さ、り、て、上、ハ、急、流、激、流、急
ふ、から、ぞ、宇治。は、橋。を、尤、絶、示、也。下、流、も、人、集、ま、る、
茶屋。を、も、あ、ざ、れ、ハ、い、づ、ち、も、今、示、れ、あ、之、浪。を、茶。
大江の寸法。三大橋の以、東、を、上、首、と、枝流。の水、を、
茶。を、橋。を、泥。臭、い、づ、れ、も、汲、て、煮、る、に、不、堪、あ、坂。有、橋。
お、の、乳、を、海。あ、水。を、清。し、山。下、溜。溜、の、水。

一。出泉。表へ。合ふも。あはる。こ。茶。漢。よ。云。化。金。石。履。
泉。ふ。増。殺。風。景。亦。止。陽。氣。不。入。能。致。陰。換。戒。
之。戒。こ。と。ろ。者。予。後。小。符。合。す。事。歎。ふ。べ。一。他。日。
南。江。向。ふ。と。も。滝。布。山。其。珠。茶。葉。録。等。身。目。に。
併。つ。み。も。と。ろ。ら。江。河。長。味。甘。か。ら。る。あ。や。流。る。も。
深。海。の。水。を。魚。魚。の。種。ま。あ。ら。す。ハ。派。葉。の。鹹。臭。
を。免。さ。す。て。茶。を。煮。る。水。掬。は。ふ。ふ。あ。ら。る。あ。
た。ら。ん。と。れ。ば。茶。に。も。ろ。香。味。の。三。絶。ち。し。是。を。美。

ち。り。む。る。ハ。水。源。を。さ。か。す。流。も。緩。ま。を。佳。不。と。す。程。甘。
甘。ま。れ。あ。再。び。三。沸。此。法。を。以。て。熟。味。ち。る。性。ろ。こ。香。味。
此。三。絶。を。全。く。す。る。あ。ハ。天。下。に。ま。れ。ち。る。べ。一。甘。泉。法。法。茶。
の。三。絶。と。和。さ。る。も。も。是。を。死。活。な。す。し。む。る。ハ。一。言。に。人。此。巧。
拙。も。ろ。能。く。こ。を。用。ふ。事。者。之。予。京。攝。の。る。に。先。て。它。
方。の。水。味。を。試。ま。さ。り。ハ。井。蛙。の。法。を。守。は。讀。人。掬。ひ。
て。飲。べ。一。又。徳。書。に。雨。水。を。上。取。と。す。能。水。湯。云。無。泉。別。
用。天。水。と。此。説。清。泉。に。劣。る。と。す。又。云。秋。雨。乃。上。梅。雨。次。

と。毛文揚ハ梅雨ノ味甘和乃其最良ノ水物也。之ヲ云々。
不雅^{ゴザツ}難^シ人^シ苦^シ山^シ泉^シ難^シ得^シ多用^シ雨水^シ之^シ味^シ不^シ及^シ山^シ泉^シ。
而^シ清^シ過^シ之^シ自^シ准^シ向^シ水^シ雨^シ水^シ苦^シ不^シ堪^シ言^シ以^シ茶^シ之^シ味^シ。
古人^シ其^シ說^シに^シ暴^シ雨^シハ^シ落^シ土^シを^シ汚^シひ^シて^シ清^シ潔^シな^シら^シざ^シり^シと^シ。
之^シヲ^シ試^シした^シ。暴^シ雨^シも^シう^シと^シも^シ市^シ中^シ其^シ雨^シ水^シハ^シ必^シ其^シ垢^シ。
浮^シ沫^シの^シ危^シあり^シ。漚^シて^シ之^シ水^シも^シ香^シ味^シあり^シも^シ色^シハ^シ美^シ。
ち^シと^シ東^シ坡^シハ^シ何^シ雨^シ降^シま^シハ^シ窓^シを^シ多^シく^シ庭^シ中^シ小^シ置^シ。
て^シ之^シを^シ飲^シむ^シと^シも^シ只^シ其^シ濁^シれ^シる^シ不^シ宜^シ也^シ。又^シ雪^シ水^シハ

五穀^シ之^シ精^シ尤^シ宜^シ茶^シ飲^シと^シ云^シ說^シあり^シ。一^シ謂^シの^シ茶^シ本^シ其^シ精^シ。
小^シ痛^シ瘡^シ亦^シ出^シ逢^シ法^シ留^シ待^シ雪^シ天^シと^シ云^シハ^シ又^シ精^シ也^シ。
云^シ々^シ音^シあり^シ不^シ能^シ以^シ白^シと^シあり^シ水^シ也^シ。雨^シあり^シハ^シ劣^シる^シ也^シ。
况^シ雪^シ水^シ性^シ感^シ重^シ陰^シと^シあり^シを^シう^シん^シ水^シ也^シ。多^シ飲^シむ^シと^シ。
冬^シ季^シ其^シ說^シ。水^シ之^シ道^シ上^シ天^シ為^シ雨^シ露^シ下^シ地^シ為^シ江^シ河^シ均^シ。
一^シも^シ也^シと^シ云^シハ^シ雨^シ水^シと^シ江^シあり^シ其^シ水^シ也^シ。其^シも^シ宜^シし^シけ^シり^シ也^シ。
又^シ甘^シ泉^シ多^シる^シ泉^シ其^シ名^シハ^シ若^シ草^シ木^シ其^シ傍^シに^シ生^シず^シる^シ物^シ。
も^シ觸^シて^シ志^シす^シや^シ。茶^シ湯^シハ^シ泉^シ上^シ有^シ惡^シ木^シ別^シ其^シ滋^シ。

根潤皆換其甘香甚若若能釀毒滋之云誤也。
又山木固欲其秀而之其惡臭傷身之難味
能全クヨウサウ使キク瓊ワラシテ子ハ瓊ハ花ハ而披拂其上而修行者其茶自不
の山を云ふ。彼を思ひあはさるる事なり。茶は香葉
香花を忌めば害らざるは汲ぐらむ。古人は之に
真源は之味真ありは之を云ふ。説とあるは甘
香甚に物に解て生ずると云んも又理ありと云
乎。又茶經に茶の生在地の水よ意をば佳らぬ

者ちしとは是自然の理にたまり折るは示。京攝の
水よ之をちし武がよきて宜しと云。又人たし水
に。筑紫の人折るを煮て東方を煎し甘香は
悉を誦すると。茶は水に合ふは善律は物に和して
類イシセイと争ヒキキを無イガくとも同じ。天竺の善律。茶理
を以て不可論。又水を行ふは瓦罍カワラウを積ニサる者なり。是
を以て不可論。又茶を去紗スキマ白帛ヤキチガメを以て覆オホひ星露ヨツユ
は茶を煎べし。水の美を去るは又茶を煎る

よ。梅水取^ラ石子^ラ並^キ瓶^ニ中^ニ既^ニ可^シ其味^ヲ又^ニ可^シ以^テ飲^ス水
と云^ハ石^ノ鐘^ノ伯^ノ水^ノ未^レ備^フも小^ノ石^ノに^テ水^ヲ留^ム子^ノ味^ヲと云^フ。
又大^ノ瓶^ニ収^メ花^ヲ梅^ヲる^ニ下^ニ放^ツ我^ノ子^ノ石^ノ数^十泥^ヲ手^ノ不^レ壞^ス
と云^フ。又^ニ某^ノ山^ノ谷^ニに^テ錫^ノ石^ノ寒^ノ泉^ノ措^ク石^ノ俣^ニと云^フ。
も是^レ也。^{措^ハ形^ニ長^ク狹^クナルヲ云^フ}又^ニ擇^ク水^中潔^淨白^石茅^ノ泉^ヲ煮^シ
之^ヲ尤^ニ妙^也と云^フ。此^ノ石^ノを^レ煮^ク者^ハ清^ノ水^ヲ煮^ク河^内此^ノ
枚^方如^ク餘^ヲ上^ニ坂^川と云^フ河^内に^テ有^ルと云^フ。此^ノ山^ノ
俣^ノ水^ノ此^ノ法^ニ近^ク江^ノ此^ノ石^ノ部^ノ此^ノ者^ノも^レ佳^ク茗^ノ少^ク

許^ノ加^テ小^ノ石^一枚^ヲを^レ俣^ニ封^シ裏^ニて^テ餉^ヲ束^ス。是^レ茶^ノ
産^地此^ノ石^ノ俣^ノに^テ煮^クと云^フ風^流を^レ興^スと云^フ。此^ノ石^ノ俣^ノ
有^ル。又^ニ水^ヲを^レ煮^ク者^ハ法^ニも^レ常^ニ尔^ル此^ノ水^ヲを^レ瓦^ノ罐^ニ煮^ク
て^テ屋^上或^ハ庭^ノ砌^ノに^テ架^スを^レ造^リ瓦^ノ罐^ヲを^レ其^上に^テ
置^キ蓋^ヲを^レ去^リ一^日早^ニ煮^クを^レ取^リと云^フ。上^ノ水^ノ水^ノとな^ル
り^テ此^ノ法^ニも^レ前^ニ也^{ナリ}。此^ノ法^ニも^レ茶^ノ新^ノ法^ニも^レ有^ルと云^フ。又^ニ
一^法。羅^ノ年^ノ賦^ノ法^ヲを^レ用^テ其^ノ法^ニも^レ茶^ノを^レ取^リ是^レに^テ早^ニ煮^ク
を^レ取^リと云^フ。上^ノ水^ノと云^フ。此^ノ法^ニも^レ茶^ノ家^ノ法^ニも^レ有^ルと云^フ。

一大厄なり。東坡ハ。嘗に玉女河の水を愛し。符せ
齋モクを汲め。且此流を枕よ。為さるるを歎息し
と云。又山居人ハ。管を造りて。水を引ユク。取ツク。石貯シ
以モ淨缸シ。とんちんシ。刺木取泉シ。と云。是也。又ハ。種
まを上首とせ。まも大鏡の節也。山ハ。澗テイ。澗レ。澗ハ。水も
軽し。江水ハ。茶の宜き也。鹹苦澗。其井より重
き。ぐら。茶チ。澗チ。山頂。泉。澗。山下。泉。澗。而。重
とんちん。澗。伯。茶。も。涼。泉。必。重。而。泉。く。佳。者。重

と云へば。一葉もむづらひ。只。と。あ。は。る。よ。出。る。ま。の。佳。く
と。云。は。ば。山。泉。澗。流。其。泉。の。と。ゆる。老。ら。し。い。茶。は。水
と。性。清。沙。石。雜。之。と。云。説。の。い。が。り。も。ち。り。み。水。は
論。程。多。の。り。試。さ。る。も。不。云。水。擇。ば。水。を。湯。の。功
なり。湯。者。定。に。茶。は。目。令。也。克。く。採。び。て。考。さ。べ。し
考。也。

選器

茶瓶サハイハ。小。茶。心。を。要。じ。べ。し。湯。候。ひ。や。ま。く。且。茶。瓶

白为上と云ふ由。或ハ梳と云鐘と云醜と云其形少
 久美^{カハリ}其^{カハリ}白磁を歩むハ茶の青黄^{ウカ}注^{ウカ}ハ守
 まを以てちち。点^ア茶^ア亦^ア点^ア梳^アを歩むハ^ア漚^ア花^アの^ア白^ア色^ア
 を試ん爲之。茶^ア釜^ア目^アの^ア耐^ア沸^ア滌^ア滌^アを^ア歩^アら^アと^アカ^アむ^アべ^アし。
 茶^ア碗^アよ^ア山^ア僧^ア迎^ア客^ア餉^ア茶^ア時^ア於^ア將^ア温^ア酒^ア向^ア茶^ア碗^ア内^ア再^ア三^ア
 搥^ア拭^ア此^ア誅^ア乃^ア茶^ア巾^ア三^ア昧^ア者^アと^アん^ア由^ア茶^ア葉^アに^アさ^アる^ア茶^ア
 具^ア滌^ア手^ア度^ア竹^ア架^ア俟^ア其^ア自^ア乾^ア爲^ア佳^アと^ア拭^ア巾^ア只^ア此^ア
 拭^ア巾^ア面^ア切^ア忌^ア拭^ア巾^ア是^ア布^ア悅^ア鐘^ア滌^ア一^ア種^ア人^ア手^ア極^ア易^ア作^ア
 茶^ア碗^ア忌^ア不^ア乳^ア亦^ア忌^ア害^アと^ア云^アり。其^アよ^ア滌^ア切^ア此^ア説^ア也。説^ア書^アよ
 盞^アと^ア云^ア。杯^アと^ア云^ア。梳^アと^ア云^ア。洗^ア必^アと^ア云^ア。上^アと^ア云^ア。巾^アと^ア云^ア。梳^アと^ア云^ア。一^アと^ア
 思^アゆ。大^ア和^ア物^ア語^アに^ア出^ア。茶^ア葉^ア宗^ア貞^ア五^ア條^アや^アら^アし^ア雨^アを^アど^アり
 したる^アお^アよ^アて^アあ^アら^アし^ア茶^アを^ア蒸^アり^アの^アと^ア云^ア物^アよ^アして^アち^アや^ア
 こん^アと^ア書^アて^ア出^アせ^アし^アを^ア無^アさ^アる^アに^ア。後^アまで^ア忘^アれ^アま^アつ^アる
 と^ア云^アる^アゆ^アん^アゆ^ア。茶^ア梳^アを^アち^アや^アら^アこん^アと^アや^アら^アら^アか^アよ^アと^アち^アお^アる^ア茶^アの^アよ^アら^アは^ア白
 つ^アひ^アち^アち^アの^アね^アを^アあ^アる^ア人^アを^ア梳^アと^ア解^アし^アい^アが^アら^アま^アう^アし^ア
 火^ア爐^ア風^ア爐^アせ^アら^アぬ^ア出^アの^ア茶^アを^ア生^アじ^ア佳^ア也^ア。効^ア用^アを^ア歩^アら^アし^ア造^アり
 ち^アや^アら^アし^ア造^アり^アる^アも^アか^アら^アし^ア象^アと^アる^ア志^ア定^アし^ア。

茶梳をちやらこんとやららかよとちおる茶のよらは白
 つひちちのねをある人梳と解しいがらまうし

茶々此國茶種十二具を出し。附録七具成
 見たる寸。道アヲ蓮シニと小瓶ハツゼンの十六具此目名由。意匠其の六
 此物と思し。ともあり。採エラびて取ら。必備ニべ
 于具。

火爐 風爐 苦節君 茶種に因あり 風炉を宿ふり 湯籬
 茶瓶 茶壺 茶瓶と 同用者 冰注 水拍 分茶
 盒 茶罌 茶匙 竹或ハ瓢 或ハ銅茶 茶盞 飛閣
 短盆 ボシ 水曹 茶茶を 洗ふ盤 受行 納行 チヤキ

烏府 降仁 固風 焙爐
 小物ハ悉く意局キキヨクに収むラフべし。竹カ籃ゴを以て茶チヤ寸
 子を於籃トラシと称ナむ。総スベて意物ハ分限ワカる。應オウじ。者シヤに
 但ニカをハら。し。意ガク富フ此家ノハ。珍メ奇キをオ探サ索ソクめて。茶チヤ者シヤ
 靡ヒ此情ヲをオシ忍シす。山林ノ士ハ。新ニ簾ヲを嫌ハシ。其ノ効ヲ用
 清潔ヲを守ら。と。採エラふハし。

収貯
 茶を貯タケふ。者ハ。錫スズ壺ヲ。傍ナり。若シキ。瓦ヒ壺ハ。次

也。づも古表にあまはて効用少し。一度它は物
を収し思ふ不可用。身弱は思殊よ忌べし。年
小云。予嘗紅石鼓。推白雲洞。其佳僧為予云
曰。瓦鐘所貯之茶。經年別味。其濕。若用錫籠
貯之。雖十年。而氣味不改。予云。然。若以流石或高
貴。亦亦。店內。年記。錫籠。封緘。固密。以茶
壺。を採。ゆ。り。子。封。して。試。ふ。茶。葉。多。く。は。餘
燥。唯。一。二。年。の。老。に。實。ち。む。但。多。味。よ。お。ま。り。て。也。

蓋。後。の。物。こ。そ。是。を。以。て。瓦。壺。に。錫。籠。を。掛。り。こ
そ。な。し。採。む。錫。瓦。に。優。劣。に。あ。ら。ず。忌。れ。新。古。
製。造。に。工。拙。に。係。る。な。し。茶。壺。子。も。亦。同。じ。か
ら。一。時。古。製。に。ま。む。よ。え。け。後。の。所。為。
陰。濕。を。忌。む。煙。葉。を。不。避。雨。雪。交。替。の。日。封。を。再
く。な。す。と。也。盒。子。に。分。取。て。ほ。も。克。々。封。固。す。べし。壺
中。茶。減。す。れ。其。を。洞。よ。濕。氣。浸。透。て。侵。入。茶。葉
を。害。す。棚。架。上。よ。茶。壺。其。口。を。將。て。下。に。朝。て。放。置。

し。濕烟入るし。又茶壺を槌灰ツラヒの煙を蒸法ウツクに
大楠ナラフケの先茶壺ツボを収め上下四面より灰を以て瘧ウツク
む。茶を分取日能ケルを以て灰入て茶を害すへし。
西土ヤエサの若茶ヤエを以て茶壺ツボ此口を包む若ヤクよく
濕烟を透トホす。又建埴ケンシヤウと号して竹籠タケカゴを二重に
造り。土間に若茶ヤエを夾入サシする者あり。國ウチ茶壺ツボの
予是を授受して瘧ウツクむ思ふ。是思ふ久茶壺クツボの用は地
べりベリを望カクシ金タグヒ子タグヒは属タグヒと云ふる者也。

久藏

茶を貯タケするに久茶壺クツボの用は。茶壺ツボを相半
りして再び封密フウシすべし。茶壺ツボの極天ツボの壺中
に在ても湿を感ず。映晴ウツクを行て急ツボの焙煙ウツクの乳
すべし。焙煙ウツクは火の温ウツクくべし。是を又火と云。火
勢ウツク極ウツクち水ウツクを急ツボ焦ウツクして茶款ウツクを殺ウツクす。其の味
て炙ウツクるも同法也。茶と火は凡ウツク一月を去べし。茶壺ツボ
に焙ウツク茶ウツク法ウツクは由ウツク及至ウツク後ウツクなる。焙ウツク一次ウツク秋分ウツク後ウツクなる。

少く法ハ未詳。茶録の東陽永叔乃後存ハ元水ハ茶
爲物之至精而小園又其精者録ハ存ハ所謂龍茶
者是也。蓋自君漢始造而宋真仁宗尤所
珍惜。隆輔相之臣未嘗輒賜。惟南郊大禮
致齋之夕中書樞密院各四人共賜一盞。宮
人剪キ剪ガ金ニ爲ラ龍鳳花ヲ浮ラ貼シ其上ニ有リ座ハ
割リ以テ歸リ不敢テ碾シ試シ宰相家ニ我ハ以テ爲シ之寶時ハ
佳客出而侍飲ハ爾ハ此ハ不敢テ碾シ試シと云

語と。茶史に所云と合ハちハるハ。龍ハ茶ハはハるハや。
是故朱氏ハ法ハ傳ハと云ハ出ニにハ古ハハハ扇ハ山ハもハ抹ハ茶ハを用
ひハり。鳳園ハ龍茶ハとて龍鳳ハ花ハ形ハ造シりハかハあハりハ
る時ハ少シ切テ点シと云ハハハ切テりハやハ昔ハ也ハ蒸シて研ル
と云ハ不敢テ碾シ試シと云ハ宋ハ乃ハ切テ即チ點シ碾シと云ハ老
も思ハひハ殊ニ亦ハ形ハを龍鳳ハに造シりハあハりハ
と云ハハハ偽シ龍鳳ハ花ハをハ金ハをハ截シ剪シりハてハ園ハ子
以上ハにハ法ハと云ハハハ園ハ録ハと云ハるハのハ白ハなるハ茶ハ

又茶史に。茶園茶片。雖出古製。然皆出碾磨。殊失
真味。も云へば。一度碾磨して。餅を造り。老ちれば。
茶其香も味も劣る。よる。か。く。し。只久しを以
て。その茶。煎。出。現。の。水。あ。ら。さ。す。一。後。出。時。
至。り。得。而。能。餅。不。る。の。語。を。去。仁。東。孫。増。也。世。は
諸。ち。久。し。か。を。な。る。か。を。示。と。す。て。お。申。也。

取火

火。は。炭。を。良。材。と。す。榲。炭。は。焙。茶。燄。と。て。宜。し。
焙。茶。燄。を。あ。ち。る。を。活。火。と。云。又。武。火。と。云。焚。炭。は
湯。の。氣。純。く。茶。に。色。香。不。真。と。い。ふ。松。竹。楸。の。葉
を。薪。を。炭。に。上。よ。産。む。松。竹。は。性。炎。氣。烈。し。こ。し。へ
ども。烟。蒸。湯。よ。入。則。ち。茶。に。害。あり。炭。よ。之。も
地。の。う。ち。を。ほ。ろ。く。る。ぬ。も。甚。く。こ。し。を。用。ふ。は。火
を。作。り。味。も。出。ハ。湯。の。効。や。し。侍。士。了。然。也。任
み。あ。ら。ず。新。法。と。い。ふ。べ。し。

附餘

客と對する饗宴式茶寮は結構然るを
法則傳りて古き人々徳なり。但し株刺
舟の契りて進退活用なるぬ者心ゆ。是に轉
るを拙なり。是を惡むハ細也。古きを重んずし。
陸樹より茶寮は此の居赤の園居故小寮子
嘯軒埤垣之西中設余亮凡瓶汲汲注。注。注。注。
之具成充擇一人指通。若者主之。一人佐。炊。汲。
客到茶館。起。云。云。ハ。張。茶。亦。も。も。

らるる所也。廬園が七碗。此の及園を依る
紗帽。自。吃。云。云。ハ。文。雅。な。り。人。の
儀。ひ。が。な。り。宋。の。趙。行。也。似。事。林。の。清。致
を慕ひて。客坐。云。云。りて。茶。子。茶。を。行。
忠。連。に。云。云。る。雲。林。罷。飛。曰。子。ハ。王。孫。の。名。也。此。好
所。を。云。云。む。風。味。を。不。知。ハ。後。子。な。り。と。云。云。ハ。茶
器。は。滑。熟。也。飲。茶。者。ハ。茶。中。之。魁。若。不。行。そ
起。而。信。口。哺。吸。と。謂。稱。何。其。強。能。趣。固。不。易。知。者

趣亦不易遠行口乳大鐘劇飲者不吉也酒酣肺
焦痰呼解渴者不吉也飯後漱口擦吞直飲
者不知也并水澆茶鐵忘悟者不吉也必
也山隴涼雨對客清談時去之躡履在山扣
舷泛棹時去之竹樓待月草榻迎風時去之
梅花樹下讀雜詩時去之楊柳池邊聽黃鸝
時去之知其趣者淺斟細啜賞清風透五中
自下而上能使支頰微紅冬令温室不取月

身和暖如飲醇醪亦令人醉然第浩大味至于
箇中滋味是在得趣者自知之若涉淺水使
魚等二義之云にりてハ茶は其面目之云に
茶未漢蘇子瞻也やてハ飲するは只日に茶
て玩ふれども宜ゆはハ陶陶然此吾弦外琴の
多しに其趣を知る人も陸村詳は云る茶
作ハ茶のよきなり涼茶淨室世几の意借茶
道院松風竹月晏坐以清談把卷又茶

遺事

日吉社記云。傳教大師入唐之時。弟子將來云。傳教大師。桓天白。延曆廿三年遣唐使。屬^{ツキ}て渡り。同廿四年に帰朝せり。傳^テ天台法而帰^ル。獻^ス經論佛像。と云々。あり。弟子將來ハ小子^{コナリ}まで記^シされぬ。なり。傳^テ弘仁六^ニ年。ハ十余年前^{シヨ}なり。之。漢^{カン}宗^{ソウ}天^{テン}白^{ハク}に梵^{ハン}刹^{シャク}寺^ジを^テ進^スめ^ルなり。ハ。此^{コノ}故^{コト}りて。嚴^{エン}岳^{ダク}ハ^ハ種^{シュ}々^{ダク}なり。

とも云べし。祝部行丸の日吉社密記云。毎歳
卯月未日。二宮八王子十禅寺。三宮以淨水煮茶
茶調進非古法云々

類聚國史。帝王部弘仁六年六月令畿内並近

江丹波播磨等殖茶每歲献之

權記行成日記云。長徳元年十月十日。出納爲親
造茶所請者。今年料造進御茶料物。文法
此ハ茶の製造此江ハ於多しと云ん由

茶園ハ大内表裏の時主殿寮の東にありし也。
拾芥抄にあり由。或云。今考ふに。一条大宮ハ西十中
ありへきなり。以上東渡

五雜俎云。客中若遇無甘泉。去処。但以此苦
水急之。數沸。後澄。至冷。去其泥滓。復急之
即甘矣。此亦古人煉炭之法也。と云々。と云々。され
ば試みるに。もろ臭ハ去がし。只沈む。と云々。此
術にて。茶類を。あやまつも。さへ。又云。人生飲

麤糲衣毼毛皆可耐惟無水烹茶殊不可
耐無山水即江也無雨水即河水但無苦鹹即
不失正味矣。水既云知新錄の制とあ似たり。
彼ハ星竅を烹るといふを勝るといふ。苦鹹を云て
身臭をいふとさる。いづれも精微ならず。苦鹹ハ味
之身臭ハ氣之味ハ制を俟て易ふべし。一歩ハ去べ
ぬハ羅牟毘伎を以て英靈を承るにさと
はべし。弁水



寛政六甲寅年仲冬刊

徳川清右衛門 版

明治四十年記
天童生透馬

